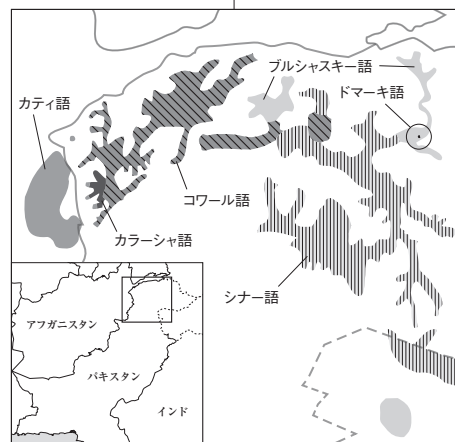


危機言語を救わない

よしおかのぼる
吉岡 乾

民博 民族社会研究部

口頭伝承は無形文化遺産の典型であるから、それを担う言語は無形文化遺産を構成するといってもおかしくない。しかし、無形文化遺産の価値づけを担い手に委ねているユネスコでは、担い手自身が関心を示さない言語の継承を強制できない。



ユネスコの太鼓判

ユネスコが危機言語として指定している言語は、約二五〇〇言語ある。その危機言語リスト（二〇一〇年）では、パキスタン国内の危機言語は二八。そのなかには、わたしがこれまでに調査した言語が五つある。「脆弱」レベルのプルシャスキー語とコワール語、「危険」のカティ語、そして「重大な危険」のカラシャ語とドマーキ語が該当している。



プルシャスキー語を話すドマ人の子どもたち

さて、これらがユネスコに

よって危機だと認定されていることをわたしは、今調べてみて

初めて知ったのだが、では知ってすぐに「なるほど」と納得したのかといえは、そんなこともない。ドマーキ語は確かに、かなり危機的であることが、現地調査中にも実感された。中年層でも流暢に話せる話者は限られており、若年層にもなると、単語やフレーズは知っていても話すことは難しい。流暢な話者は一〇〇人未満。次世代への継承はほとんど途絶えていて、放っておけば数十年で消滅するのは明白である。一方、カラシャ

語は、わたしの行った谷では子どもたちもよく喋っていた。プルシャスキー語やコワール語に至っては、話者も一〇万人以上は優に居るし、日常生活で第一言語として使用している。何ををもって「脆弱」としているのだろうか。

高まり始めた言語意識

いわゆる少数言語のなかには、話者が自分たちの言語に対しての意識を高めて来ているものもある。例えば、プルシャスキー

語や、上には拳がっていないが、コワール語と似た状況であると感じられるシナー語などは、言語意識が近年になって向上している気配がある。私設とはいえないプルシャスキー語研究アカデミーや、シナー言語文化振興会といった組織が生まれて来ているところからもわかる。

これらの組織はそれぞれが、無文字言語であった各言語に文字をあらたに制定し、書籍を出

版して普及しようと試みている。それらの文字は、体系的や利便性といった面で、決して良い出来だとはいえないが、そういった動きが内から出て来ていることは注目すべきだ。但しこれが、「危機言語」だから起きている運動かといえは、必ずしもそうだとは思えない。言語地位の向上、文芸の発展への願望は、言語の大小にかかわらず起こるものであり、これらの言語の話者のなかに裕福な、学問的見識を広げられる環境にある者がそれなりに居るからこそ起こったのだとも思える。

言語の取捨選択

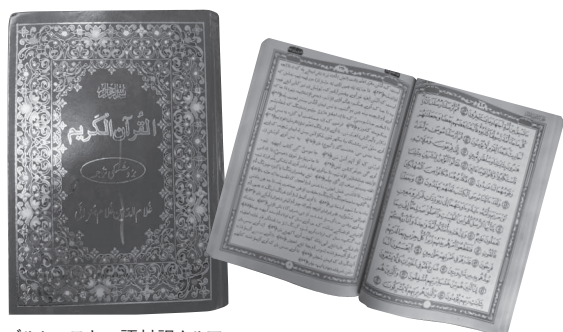
何故こういった動きが、危機感から生じていると判ぜられないか。その疑問への答えのひとつが、ドマーキ語の状況にある。ドマーキ語は、わたしの研究している言語のなかではもっとも危機的な言語である。けれども、ドマーキ語話者である当人

らは、言語保存などとは一言も言わない。自分たちの言語が消滅しかかっているという意識は強く共有してはいるが、残そうという動きは見受けられない。むしろ、わたしが彼らの村を訪れた当初、彼らはドマーキ語の存在そのものを隠していた。彼ら自身はその隠蔽工作の理由を語ろうとはしないが、周辺の村の人たちの様子から推し量るに、「ドマーキ語を話すこと」が、毎歳の対象であることが一因となっているであろう。ドマーキ語話者集団であるドマ人は、自他ともに、周囲の民族よりも下位であると考えられている。だから、ドマ人であることを示してしまふドマーキ語の使用は、嘲笑の対象になる。その言語を習得しても、極めて限られた相手としか交流ができず、バカにされる理由にもなるというのであれば、彼らがドマーキ語を捨て去ろうとするのも当然だろう。危機言語となると、すぐに言



ドマ人同士でもドマーキ語はほとんど出て来ない

語保護とか、救済とかに思考が向かってしまふ研究者は多い。けれども、敢えて捨てることを選択しているようなドマ人を見ていると、そんなのは研究者のエゴに過ぎなく思える。今、研究者としてのわたしがすべきことは、躍起になって言語を救おうとすることではなく、彼らが言語を残したいと願ったときに、それをかなえられるだけの言語データを記録しておくことだ。



プルシャスキー語対訳クラーン